

文化

✉ bunka@asahi.com

徳川慶喜「名誉回復」の裏側



60歳ごろの徳川慶喜

江戸幕府最後の将軍、徳川慶喜(1837〜1913)。「朝敵」からの名誉回復などの裏側をつづった自筆の文書が初公開された。文書は『秘密事情』と題され、慶喜50歳の1886(明治19)年から98(同31)年までの手紙や文書案を自ら書き写したものだ。慶喜

の子孫が保管し、存在も公にされてこなかったが、没後百年を迎え、千葉県松戸市市戸定歴史館で12月15日まで開催中の「徳川慶喜」展で公開されている。

幕末に謹慎した後、父祖の地・静岡で隠棲した慶喜は、97年に61歳で東京に移り住む。「膀胱病ニテ、常々手当ヲ要シ、且下冷小便近ニテ長座難堪候」。持病が悪化したのだった。銀行金利の下落で「収納減小眼前」となり「今日ノ体裁」での暮らしが難しくなる。と、経済的不安も訴えている。

慶喜自筆の『秘密事情』一いづれも徳川慶朝氏所蔵



これまでは、東京の子らと離れて暮らす寂しさや、健康上の不安

過去は「サッパリ捨て」…天皇拝謁 親王が説得

に備えることなどが上京の理由とされていたが、実際はかなり切迫した状況だった。

朝敵とされた慶喜だが、明治後半、娘が皇族に嫁ぎ、98年には天皇に拝謁、その4年後に公爵となるなど名誉を回復する。その経緯も今回、明らかになった。

上京にあたり、慶喜は交際を慎み、静かに暮らすと徳川宗家当主の家達と約束した。だが実際は上京翌年、天皇に拝謁。「秘密事情」には、拝謁を固辞する慶喜に対し、親戚で皇族の有栖川宮威仁親王が「是迄ノ事ハサッパリト御捨ニテ」拝謁するのが「王室ノ御為」と説得した様子が記される。

同館の斉藤洋一館長補佐は「明治国家は体制を盤石にするため、徳川家との融和策を進めた。その仕上げとして、拝謁による天皇と慶喜の関係正常化を重視したのである」とみる。大庭邦彦・聖徳大学教授(日本近代史)は「拝謁は徳川家にとっても、朝敵ではないと公に示す格好の機会となった。当時は生々しくて公表できないが、後世に真実を伝えようとの慶喜の思いが伝わる」と話す。(小川雪)